

差を現在検討中である。

【考察】ラットにおける垂直的骨増大モデルを確立出来た。また、皮質骨穿孔をしなくてもチタンキャップ内面に血餅が形成され未分化間葉細胞が骨細胞や脂肪細胞などに分化していた。これは、確実なスペースメイキングがなされていることで可能であったと考えられる。

18) 鼻部の筋に関する解剖学的研究

○祐川 励起, 宇佐美晶信, 齊藤 博
深井 直実, 伊藤 一三
(奥羽大・歯・生体構造)

【緒言】鼻部の筋は皮下の結合組織と交錯していて肉眼解剖の手法で剖出するのが困難なため、筋構成に関して不明な点が多い。そこで、最も剖出の困難な鼻翼部の連続パラフィン切片を作成して組織学的に観察し、鼻翼部の筋構成を明らかにした(奥羽大歯学誌35; 161-167, 2008)。今回、鼻翼部以外の部位(鼻中隔, 鼻尖, 外鼻孔底, 鼻背)を観察して鼻部全体の筋構成を明らかにした。

【材料と方法】奥羽大学歯学部生体構造学講座所蔵の解剖実習用遺体15体(男性; 9体, 女性6体, 平均年齢; 72.5歳)を用いた。鼻部の筋の剖出を実体顕微鏡下で行い、剖出出来ない部位は組織学的に観察した。

【結果と考察】鼻中隔下制筋は上顎切歯歯槽隆起内側から起始する。この筋は肉眼解剖の手法で鼻中隔手前まで剖出出来た。次に鼻中隔部を組織学的に観察し、筋線維束が前方に向かって走行して鼻尖手前の皮下の結合組織に停止しているのを確認した。鼻中隔前方の鼻尖部を組織学的に観察すると、鼻部構成軟骨(大鼻翼軟骨)を皮膚が覆った状態で筋線維束は確認されなかった。鼻中隔下制筋の起始部外側の筋線維束は外鼻孔底に向かう。この線維束は起始部だけ剖出出来た。組織学的観察では線維束が横走する口輪筋の線維束間を上方ないし前上方に向かい皮下の結合組織に停止していた。外鼻孔底の筋の起始部外側から鼻筋が起始し、上方に向かって鼻背(横部)と鼻翼(翼部)に至る。横部は肉眼解剖の手法で剖出出来た。組織学的観察でも内上方に向かう板状の線維束として確認された。翼部は、鼻翼部の組織学的観察で

横走する線維束として確認された。上唇鼻翼挙筋は上顎骨前頭突起から起始して下方に向かい大部分が上唇に、内側の一部線維束が向きを変えて鼻翼部に進入する。内側の線維束は鼻翼部手前まで剖出出来た。鼻翼部の組織学的観察では、内下方に向かう線維束として確認出来た。

以上の観察結果と鼻翼部で確認した鼻翼部固有の線維束の走行状態から、鼻孔拡大は上唇鼻翼挙筋の内側の一部線維束と鼻翼部固有の線維束により、縮小は鼻中隔下制筋と外鼻孔底の線維束さらに鼻筋の横部と翼部によりなされると思われた。

19) 低分子キチンキトサンの鎮痛効果に関する研究

○千葉 有, 田谷かほる, 寺澤理恵
今井啓全¹, 木村裕一¹
(奥羽大・歯・口腔病態解析制御, 歯科保存¹)

【目的】自然界に広く分布する天然多糖であるキチンキトサンは創傷治癒作用をはじめ、抗腫瘍作用、血清コレステロール低下作用などの薬理作用を有することが知られている。また、キチンキトサンオリゴ糖を全身投与した場合、鎮痛効果が得られるとした報告もなされるようになったが、不明な点も多い。

そこで今回我々はキチンキトサンオリゴ糖の全身投与を行った場合の鎮痛効果について、1次スクリーニングとしての基礎的研究を行った。

【材料】実験動物は6WのICR雄性マウス、また実験薬物は1%および10%キチンオリゴ糖水溶液、1%および10%キトサンオリゴ糖水溶液、5%アスピリン懸濁液を用いた。

【方法】実験1としてHot plate法による鎮痛試験を行った。すなわち、各実験薬液を体重10gあたり0.5ml腹腔内投与した後、53℃にセットしたHot plate上でマウスが反応するまでの時間を計測した。これを薬物投与後120分まで15分間隔で行なった。

実験2として酢酸法による鎮痛試験を行った。すなわち、各実験薬液を体重10gあたり0.5ml腹腔内投与、30分経過した後、0.7%酢酸溶液を腹腔内投与してwrithing反応を10分間観察した。

【結果】1%濃度においては、キチンおよびキ